

一九八〇年代以降、日本の宗教学では宗教概念の歴史性に注目が集まるようになり、多くの成果が生み出されてきた。しかし、日本宗教学自体の歴史性については概念研究ほどの蓄積はみられず、特に大学制度に着目した成果は非常に少ないのが現状である。この点については、宗教学に隣接する他の宗教学研究分野（仏教学、キリスト教学など）でも同じことがいえる。歴史的事実に鑑みるに、日本では政府主導で高等教育制度が創始され、大学は学問の府として位置づけられた。宗教学研究も例外ではなく大学を基盤として展開してきた。その事実是谁もが知っているが、その内実については明らかとはいえない状況にある。そこで本パネルでは、学問制度史を共通の方法としながら、四つの視点（①高等教育制度、②基督教学講座、③僧侶養成と近代仏教学、④哲学科の設置意義）から報告を行った。なお、この四つの視点は全体として重層構造をなしている。①では学問制度と宗教の関係（メタレベル）について全体像を提示し、②・③では個別学問の制度化経緯（ミクロレベル）、④では宗教学研究が哲学という学問カテゴリに包括されたことの意義（メゾレベル）について論じている。

各パネルリストの具体的な報告内容は、以下の通りであった。

①江島は、近代日本の高等教育制度が国家の独占領域であった事実に着目した。教育と宗教が明治期に制度的分離をみたことはよく知られているが、実は、学問においても宗教は排除されていた。ただし例外として、宗教を学問的に対象化することだけは認可されていた。報告は、この認可の経緯を法制度面から辿るとともに、その認可がどのような歴史的意義を持つに至ったのかを明らかにした。

②大正期に東京・京都の両帝国大学で相次いで、「宗教」一般ではなく、個別の宗教を専門に研究する講座が成立していく。宗教学大学のみならず、帝国大学もまた、宗教と大学が折衝する場であった。小柳の報告では、これらの講座の中から京都帝国大学のキリスト教学（基督教学）講座を取り上げ、（一）講座設置の経緯を他の宗教学研究の講座の動向にも留意しつつ紹介した上で、（二）基督教学講座の初代教授である波多野精一が「基督教学」をどのような学として構想していたのかを明らかにした。

③モントローズは、明治時代の仏教学系高等教育機関における僧侶養成カリキュラムに着目した。近世以来の伝統的な僧侶養成は、明治政府が創設した近代的な学校制度に準じながら改革された。この改革では、宗学を中核に位置づけながらも、多くの近代的な学問を採用していった。そして同時に、新しい時代に相応しい僧侶教育のあり方が活発に議論されていた。本報告では、真宗大学、曹洞宗大学、大正大学（前史）の比較を通して、そこでのカリキュラムおよび僧侶の近代的な役割の変化を明らかにした。

④松野は、宗教学系大学（神道・仏教）と哲学科の関係に注目した。世界史的にみると日本の大学は、すでに欧米で確立されていた諸学問を個別に輸入すればよく、その源である哲学にまで関心を寄せる必要性がなかった。ゆえに、各大学において哲学は必ずしも重んじられてはいなかった。しかし、宗教学系大学では哲学こそが自らの思想の担保と位置づけられていた。本報告では、日本の宗教学研究史上で見過ごされてきた哲学の歴史的意義に注目し、それが果たした役割を確認した。

コメンテータには増澤知子氏を迎え、氏の持つ欧米大学史に関する知見を踏まえることで近代日本の宗教学研究を相対化し、その特質をより明確化することができた。なお、パネルでの発表・質疑応答等は、全て英語で行われた。